

科學の價值と本質

カール・ヤスパース

—Rayno philosophique 一九三九年、一、二月號より—

中川秀恭譯

科學は、その内容が強固な確實性と普遍的な妥當性をもつところの方法的認識から成る。右の命題のうちに科學的認識の三つの根本的特性が表明されてゐる。

第一に、科學は必ず方法的意識を伴ふ。即ち、私は知識をもつと同時に、私を或る結果に導いた途を知る。さうして、途を知ると共に私はまた、それ／＼の知識の明確に規定された領域とそれの意味の限界とも知つてゐるのである。非方法的にものごとを主張したり断定したりすること、或は又何等疑問を投じることなしに氣前よく信じ込むこと、これ等は科學的認識の反對のものである。このやうな純粹に受容的な知識は、たとへその内容

に於ては、科學的研究から結果するものだとしても、かかる認識の仕方はやはり非科學的であつて、科學に對立する迷信の出發點となる。何故なら、內的檢討を缺いた單純な受容は、種々の偶然的な意味や内容に私を委ね、言はば何の保護もなしに私をそれ等のものに引き渡すこととなるからである。科學的研究の結果なるものは、かかるものとしては、同時にそれ／＼の觀點に關してのその知識の相對性、云ひ換へればその方法とそこで知り得べきものゝ意識に關してのその相對性を保留してゐるものなのだが、それが科學に對する妄信の内容となつて來ると、誤つて絕對化せられることとなるのである。

第二に、科學的認識は、さういふ認識としては、強固な確實性を有つてゐる。と云ふのは、私が科學的に認識するところのものは、單純な理解力にとつても理解し得るものであり、單なる事實としての正しさ——私自身の本質を賭することを必要としない正しさをもつからである。このやうな認識に對立するものが信念である。信念は生きてゐる人が自分をそのうちうち込むことなしには眞實ではない。この故に、ガリレーにとつては、彼が宗教裁判の權力の前に自説を棄へたことが賢明なことだつたのであり、それだから、彼が地球の運動を否定した後、だがやはりそれは廻つてゐる、と云つたといふ物語りが——たとへ實際にさう云はなかつたにせよ——その意味を反映してゐるのである。即ちガリレーは取消しといふことが眞理に何の變更も加へないのを知つてゐたのである。これに反してジョルダノ・ブルーノは、永遠に記憶せらる可き自己制御の勝利によつて、自己のうちにはヒロイズムを育てあげた。このヒロイズムは、第二義的な事柄に於けるどんな訂正にも好意ある態度をもつ

て處することを妨げはしなかつたが、根本的な彼の哲學的信念を否認することを彼に許さない。この信念は、強制力ある科學的認識に於て存するのではなく、むしろ一度見捨てられ否認せられるならば、その眞理性自體が消滅し去るやうな認識のうちに存在する。それで、この信念は、この哲學者が彼の信念の操守に於て示したところのかの熱狂のうちにこそ、その眞正なる證示をもつのである。

第三に科學的認識は普遍妥當性をもつ。科學的認識の科學的認識たる所以は、各人がそれを根據あるものとして實證し得ると云ふ事實によつて確かめられる。この故にまた、科學的眞理は實際、人が科學的に思惟する限り、普く通用する。科學的認識に就いてのかやうな一致は、普遍妥當性の外面的な、眼にみゆる徴である。これの反對をなすものが、哲學的信念の——諸々の科學のうちにもまた現存するか「哲學すること」のもつ非普遍的なる妥當性である。人は次のやうに云ふことが出来る。信念の無制約性は非普遍的な妥當性と相關つてあ

る、——と云ふのは、若し信念が信念として存在するとすれば、それは私の保證を何等必要としないであらう。さうして又、科學的認識の相對性は普遍的な妥當性と相關的である、——何故なら強固なる認識が同時に又絶對的な認識であつたとすれば、探究の探究たる所以は失はれてしまふであらうから。

前世紀の間に發達したこのやうな科學の概念は、科學を思惟の限られた一領域に局限した。これに對して、しかしながら、科學のより廣義な一つの概念が存在する、即ち概念を用ひ、合理的な手だてによつて明晰に證示されるあらゆるものを科學と呼ぶのである。思惟は、私にとつてこれ迄未知である事物の認識をあたへるのではなく、むしろ私が實際に見、欲し、信じてゐるところのものを浮き出さしめ、私自身の意識の明白な分野をつくり出す。更に又思惟は、私の本質によつて內的に滲透されてゐると云ふ意味に於てのみ眞理として考へられるやうな一つの形式を構成することが出来る、例へば哲學の諸種の思辨に於ての如く。最後に、思惟はまた暗號の言葉

でもあり得る。それは解明しながら同時に掩ひ隠すものである。これ等の注目すべく、また生氣づけるところの思惟の諸努力は、至高の明晰さをもつた嚴密性の意味に於て、また知られ得るものの範圍に屬すると云ふ意味に於てのみ、科學的なのである。思惟のこれ等の努力は、科學より以上のものであると同時に、より以下のものである、即ち人間を變化する創造的思惟である限りに於て、より以上であり、我々にしつかりときまりのついた知識を與へないと云ふ點に於ては、より以下である。かかる次第であるから、科學についてのより狹義の概念を明確にすることが決定的に重要である。現代人が科學に就いて語る場合、彼等は實際にはこの概念を——屢々不明瞭にはあるにせよ——目においてゐるのである。何故と云ふに、そのみが強固にして且つ——私の本質を賅することなしに——普遍的に妥當する如き眞理を純粹悟性に呈示するからである。

ところで、このやうな科學は越えることの出来ないその限界をもつてゐる。それについて、簡単に次の諸項

を誌しておかう。

事象の科學的認識は存在の認識ではない。その理由は、科學的認識は特殊のであり、限定された事物に向けられてゐて、存在自體には向けられてゐないからである。これがため、科學はその知と云ふ事實によつて、まさに無知の——即ち存在自體が何であるかについての無知の最もはつきりした知を哲學的に呼び起すのである。

科學的知識は人生に目的を示すことが出来ない。それは當爲的價値を立てない。科學的知識は、それが科學的知識である限り、指導することが出来ない。科學は自己の明晰さと決斷とによつて、我々の生命の或る他の根源に導くのである。

科學は科學自身の意味が何であるかの問ひに答へることが出来ない。科學が存在すると云ふ事實は、それ自身もはや科學的に眞なるものとして證明されることが出来ず、また證明されるべきものでないやうな諸動機から來てゐる。

科學の上述の諸限界は、「最も深刻な欺瞞を生ぜしめた。しかもまさしく、人が科學から、その興へ得ないものを期待するところでこれを生ぜしめたのである。信仰なき者が、自己の生活を如何なるものの上におくことが出来るかを自分に教へるに適した代用物を、科學のうち求めた場合、哲學にあきたらぬ人が、科學のうち、凡てを包括することによつて全體性に到達するであらうところの眞理を求めた場合、また内面性を缺く人が、科學が生起する終結することなき反省によつて、科學本來の空疎性をさとした場合——このやうな場合には何時でも、科學に對する盲信の一ときのとて、科學は憎惡と侮蔑の對象になつたのである。併し乍ら、よしのやうな諸々の途の眞でないといふことが最初から分つてゐたとしても、問題はやはり残るであらう。即ち、科學の諸限界がかやうにはつきり認められたとして、科學はなほ如何なる價値をもち得るであらうかといふことである。

ベーコン及びデカルト以來、人々は科學の意義をその

實用によつて辯護しようと思つて來た。知識の技術への適用性——勞働を便利にする、人間の必要をよりよく満たす、健康を改善する、國家及び社會の諸制度を制定する、最後に、正しい道徳をさへ發見する等の爲に——この適用性が科學への決定的な推進力と考へられた。ところで、少し深く反省すれば、第一に、技術的應用にはいづれもその限界のあることが明らかになつて來る。技術化は、人間の凡ての可能性の非常に廣大な領域の單なる一つの部分的分野にすぎない。第二に、また諸々の基本的な大發見を促進したのは決して科學の直接なる實用ではないことが知られる。これ等の諸發見は、應用といふやうな考とははなれて、探究の精神の豫見し難い源泉によつて達成されたのである。數多き特殊の諸發見に於て、有益な應用は、既に實現された科學の力によつてでなければ成果をもたらすものでない。探究の精神と實用的發明の精神とは本質的に異つたものである。なるほど、科學の實用性と、生活の目的に役立つための科學の追求とを否認しようと思ふのはたしかに誤りであら

う。このやうな意義もまたたしかに科學に屬する。少くとも科學の若干の部門に當てはまる。けれどもそれは科學の意義の全體性をも一致點をも構成し得るものではない。そのみが科學を作つたものではなく、またそのみでは、長期にわたつて科學的研究の生命を保つことが出来るものでもないであらうから。

それで、科學が技術と實際的生活との目的への從屬の理由によつて「下位におかれること」を拒むために、科學が自己目的であるといふことが主張された。ところで、事實の單純な個々の確認、個々の方法のもつ正しさ、並びに何等かの知識の個々の擴張、これ等のものに一々その價值を認めねばならず、更に凡ての科學的勞作そのものが手を觸れることの出来ない價值として立ち現はれるといふこととなつて來ると、そこに奇體な困惑が生じて來たのである。すなはち、事實といはるゝものはしてしない諸々の確認、その各々の要素の間にもはや何等相互の聯關のないやうな多様性への科學の分散、實際には意外なる無知と盲目とに支配される人々に

於ける専門的知識から来る自己満足——これ等の現象及びその他多くのことがらが、科學の自己目的性なるものを疑はしいものにしたのである。

科學はそれ自身にまかせておかれると頽落する。勿論、科學は、その窺知しがたき創始以來、一と度び發足した以上は、しばらくの間自分自身の力で進歩し得るやうに見える。だが間もなくこれと反對の側面が現はれ、科學の建物の崩壞を徐々に引き起さうとするにいたる。科學はそれを支へる信なくしては、全體として眞であることも、生命をもつことも出来ない。科學はそれ自身に委せられてはあることは出来ない故に、導きを必要とする。かやうな導きがどこから來た如何なる意味を科學にあたへるかを知ることが決定的である。若し導きが外部から來るとすれば、科學は他のあるものへ到るための一つの手段でしかないであらう。導きは内部から、科學全體を包括する一つの源泉から、無制約的な知識欲そのもの *le vouloir-savoir inconduito né mème* から由來しなければならぬ。かくして明らかに、このやうな導き

は、あらかじめ熟考された目論見によつても、眼の前に出して見せられたり直ちに到達し得たりするやうな目標によつても充分に働くことが出来るものでなく、知識による勝利のうちのみよび醒され輝き出して來るところの或るもの、即ち理性によつてのみ活動することが出来るのである。だがこれは如何にして可能であるか。

我々の根源的知識欲は偶然的な關心ではない。むしろ、我々のうちに於ける無制約な飛躍が、我々自身の本質の尊嚴性を發揮せしめるのは何よりも知に於てである。孤立した知識は、決して私を満足せしめない。私は絶えずより先へと進む。私は知識に於て、自分を全體に迄擴張しようと欲する。根源的知識欲に相應しい運動の導きの役をつとめるものは、存在に於ける一なるもの *Um do Unico* である。知識欲は何かの特殊なものに分散しないで、特殊を貫き通して一なるものを見るのである。と云ふのは、直接直下に知り得るものは特殊の外にないからである。存在に於ける一なるものへの係はりをなくすれば、科學はその意味を失ふ。さうして又、こ

の係りが最も特殊化した部門に至る迄も、科學を生氣づけてゐるのである。それで一なるものは直接的には何所にも見出されない。私の認識の對象を形成してゐるものはどこまでも、特殊なもの、複雑で無限に多様なあるものに外ならない。この故に知識欲の導きは、理性によつて無限にまで強められ、さうして相互に聯關するところの二つの動機によつて絶えず培はれる。即ち、一方に際涯なくいやしくも實在的なものにわたるところの知識欲と、他方に正にこの知によつて到達されるところの無知の豊饒による一なるものの經驗がそれである。

それであるから、科學は、先づ第一に、明晰さと決定性をもつて、私をあるがまゝに事實に直面せしめる。それは、ときと共に益、はつきりと、私をかくあると云ふ事實に面接せしめる。私はそれを言語として理解することとは出来るが、しかし十全に解釋することの出来ないやうな現象の相貌を獲得する。科學は私を強制して實在的現象に、全面的現實に直面せしめるが、それは私がそれの（現象の）言語をあまりに早急に單純化したり、又は

私の希望や傾向が私をしてその言語をあいまいに乃至は誤つて解釋せしめたりしないためである。科學は私をこの世界の美と調和の蠱惑から去つて、あらゆる分裂や、意味を缺如した凡ての事物、並びに説明のしようもない破壊の、恐怖の前におしやる。

第二に、知り得べきものについてのあらゆる途を辿りつゝ私は知によつて、かの眞實なる無知の經驗に到達する。この經驗が超越としての一なるものを私に間接的に現前せしめる。このものが私の凡ての知識欲の隠れた導きとなる。私の知識欲を生氣づけ、之に豊富な意味を興へるのは超越としての一なるものに外ならぬのである。かやうな意味そのものは、最早合理的に規定されない。それが知られてゐる限りに於ては、それは科學の課題と方法を算定する選擇の出發點として全く役立つことが出来ない。科學の中に於てのみ科學に信頼し、科學によつて運を賭することに於てのみひとは、科學がそこから生じ、而してそれに向つて進歩するところの根柢について經驗をすることが出来る。

若し、凡てこのやうな知識は何所に歸着する可きであるかと問ふならば、譬諭をもつて次の様に答へることが出来る、——それは世界を認識しようと思ふのと同じである。世界のうちでの神の讚美のためには、我々に與へられた凡ゆる器官によつてこの世界を認識し、そこに云はば神の思惟を再び思惟するのがよいとするやうなものである——たとへ映像の形式に於て、我々は神の思惟自體をでなく、ただその表はれの外面だけしか知らないのではあるが。

根源的知識欲——世界に順應しつゝそれを超越するところの——のうちに於て、理性から生れた科學の導きとなるのは何かといふことを決めること、このことこそ當該科學の意味と價值を決定するものである。哲學はかやうな導きを解明すべき思惟ではあるが、しかし哲學もまた、本來知ることを求むる人間に根ざし、その努力のうち自分に示すべきものを、命令によつておしつけることは出来ないのである。

以上凡てのことから次の結論が生じて来る。科學はそ

の上に私が安らふ可き固い地盤ではなく、不安をたててとして——この不安は私の現世的存在に固有なる、知識欲の運動なのである——知識欲そのもののうちに於て既に私を導いた超越を自分に確めるために私がとるところの途なのである。

かくて屢々經驗される知識の不満も、我々が内的な導きから遠ざかつてゐると云ふ事實によつて了解されるであらう。我々が好奇心によつて事物の單なる多様態に没頭したり、或は科學が我々にとつて單なる事務に化して了ふのでない場合に、我々はこのことを感じる。しばしば我々是我々の裡なる導きの表示——偶然的なもののはてしなき追求から我々を解放し、研究及び調査に於て選ばるべき途を決定してくれるところの導きの表示に聽従する。我々が絶えず、何よりもまづ勞作を指導してくれるべきものであり、その淵源に於ては超越としての一なるものことばであるところの諸理念に訴へることを怠つて、我々自身の内心の困惑をおしかくして、單なる勉勵をこととし、ただの仕事としての仕事といふ如き内的

な階性に身をまかせるとき、我々は殆んど心づかひの缺如といふ如きものを感じるのである。

併し乍ら、超越の一なるものに由來するこの導きは決して一義的ではない。何人もそれを唯一に眞であり、凡てのものに適するものとして把握することは出來ない。またこれを所有すると揚言することも出來ない。それは、云はば、思索者と多義的な可知物との對話のうちに發生するのである。それはいつの場合も歴史的なる認識形式の中に實現する。この形式は、それ自身として連續しつつ、我々を前に推し進め、高揚せしめる。かの導きなるものは一つの試みの如く、また一つの冒険の如きものである。

まさしくこゝに、科學が刺戟をあたへるはたらきとして、我々の存在に於ける、あらゆる眞理と眞實の條件をなす理由が存する。

科學は種々なまどはしを暴露する。そのまどはしによつて私は私の生活を安易にし、信仰を保證された認識におきかへ、更には信仰そのものをそのやうな認識に變じ

ようとさへするのである。諸々の現實を、私がその認識の負擔に耐えないがためにヴェールをもつて掩ひ隠さうとすれば、科學はそのヴェールを引き裂く。科學は無批判的な思惟が作り出した「凝結」を溶解して、その代りに無限なる探究を導き入れる。科學はあらゆる偽りの安辭を禁止する。

科學は人間の狀況に關する明瞭性の最大限を私にあたへる。科學はそれなくしては私が可能なる認識の課題に應ずることの出來ない制約である。この課題は、我々の本質に内在するもので、人間の偉大なる使命——人間に彼が耐へ得るところのものの證示を與へるやうに要求するところの使命を構成するのである。

科學は誠實から生れ、誠實を生れしめる。科學的態度並に思惟を十分に活用することなき如何なる眞實もあり得ない。科學的態度の特性は、先づ、それが強固なる知識と強固ならざる知識 *Savoir cogent et Savoir non-cogent* との間のゆるぎなき分別——私は私が何を知り、何を知らないかを知らうと欲する——である。従つてそ

これは、認識に於て私を導いた途についての知識と、さらにある知識がいかなる意味の限界内で妥當するかを知とを伴つた知識である。科學的態度は、その上に尙、私のなす諸々の斷定に對する一切の批判を認容せんとする心がまへである。思索する人間特に探究者や哲學者にとつて、批判は死活的な條件である。彼等の思索は、批判によつてその認識を検討するために、疑を受けすぎるといふことはない。不當な批判の經驗でさへ眞實な研究者に效果の多い影響を及ぼすことが出来る。批判を避ける人は正しい意味に於て知することを欲しないのである。

この故に、眞正な哲學は、科學を自己から區別すべきことは知つてはゐるが、しかし同時に隠すところなく科學に結びついてゆく。認識し得るどのやうな實在をも哲學は敢て無視しようとはしない。實在するものであり、またしつかりした仕方では知り得るところのものを、哲學は制限なしに知らうとし、それを哲學の存在についての意識の發展の上に働かしめようとする。科學的知識の無制約性は、眞理への意志にとつて、不可缺の條件

なのであるが、このことは現代に於ても同様である。その人に對して科學が眞實に自分を打ち開くところの人、即ち、毒にも藥にもならぬ知識——と云ふのは單に結果として受けとられ、積極的意義に於て體驗されたものではないのだから——の限りなき多様にも、また同化するに骨が折れ、實用的目的のために選擇された諸材料にもしがみつくことをしない人は、身をうちこんだ努力と勞作のうちに熱狂的な飛躍を感じ科學のうちに自己の生命の要素を感得するであらう。往昔に於けると同じく、我の時代にもまた、科學の魅力は、若き日に、世界が廣やかにまた明かに現はれてくるときに味はれるであらう。さうして今日も以前と全く同じく——恐らくはさらに強くさへ——科學の重要さが感じられる。すなはち、無自覺なるもの本來素朴なる力と、生命の幻覺とに對して知識が與ふるを辭せない危険がそれである。無關心に止りつつ見聞することの代りに、問ひたづねつつ理解することのためには勇氣が必要である。敢へて賢かれ！

Sapere aude! の語はしまじも本當である。

このことを自覚せる哲學は反科學的態度に對して科學的態度の保證者となる。哲學は科學的思惟の維持といふことの中に人間の尊嚴性の不可缺の條件を見る。哲學はメフィストーフェレスの警告を眞理として認める——

どうとも勝手に、理性や學問を、

人間の至高の力を、輕蔑するが好い。

奴、それだけでもうこつちのものだ——

附記 これは *Revue philosophique* 一九三九年一、二月號所

行爲の表現的性格

木村素衛著「表現愛」に就いて

柳田謙十郎

木村氏の新著「表現愛」を手にして眞先に感じたことは此の著者の個性があまりにも美しく此の書物の到る所に躍つてゐるといふことであつた。内容と装幀とが心憎いほどにピタリと合つて、ザラザラとしたその布表紙を

載 *J. Jaspers. Essence et valeur de la science, traduit par Jean H. Polnow.* を譯したものである。佛譯からの重譯であるため、原文の意味を出すことに苦心をしたが、幸ひ一九三八年に出た彼の「質存哲學」の一部に自然科學に關する敘述があり、この論文と類似した箇所も少くないので、それを参照しながら譯した。尙譯出に當つては三宅剛一先生に始終輔導をしていただいた。先生の平素の學思に併せ、ここに深甚の謝意を表する次第である。最後のメフィストーフェレスの言葉は阿部次郎先生譯のファウストから借用させていただいた。

手先でなでてゐると恰も著者の着物に觸れてゐるやうな思ひがする。集められた論文も皆著者獨特の調子の高さを示したもので、論文集といふよりはむしろ作品集とも呼びたいほどに藝術的な香りの豊かなものである。就